

(様式6)

2025年12月20日

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業実施報告書

文化庁次長 殿

住 所 静岡県静岡市駿河区大谷 5762
ふじのくに地球環境史ミュージアム
氏 名 渡辺友美

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 派遣期間 2025年11月10日 ～ 2025年11月20日

2 派遣概要

(1) 派遣先名称

27th ICOM General Conference 2025 (第27回 ICOM ドバイ大会)

(2) 派遣内容

11月12日～16日にかけて第27回 ICOM ドバイ大会に参加した。今回の大会テーマは“The Future of Museums in Rapidly Changing Communities (急速に変化するコミュニティにおける博物館の未来)”である。日本からは約40人が参加した。渡辺は各種式典を含むメインセッションのほか、同会場で行われた各国ブース展示、11月12日、13日、15日の3日間で行われた分科会セッション、16日に行われた大会エクスカーションに参加した。

分科会セッションでは12日と13日の午後にメイン会場で開催された ICOM-EXHIBITION (展示国際委員会)、11月15日の終日 IC-Day としてエキスポシティで開催された ICOM-NATHIST (自然史の博物館・コレクション国際委員会)に参加した。尚 IC-Day は事前登録制で、ICOM-EXHIBITION は定員50名が早々に満席となり選択の余地がなかった。16日の大会エクスカーションでは、自然環境保全に関するコースに参加し、バスでアラブ首長国連邦東側のオマーン湾に面するシャルジャ首長国カルバのアル・ヘファイヤ山岳保全センター、コール・カルバ・マングローブセンターを訪問した。

17日～19日は自然史と動物・水族の生体展示を中心に、アラブ首長国連邦における博物館展示の状況調査を行った。訪問館はドバイ水族館、ドバイ

ドルフィナリウム、エティハド博物館、シャルジャ水族館、海洋博物館、自然史博物館で、そのうちシャルジャ水族館、自然史博物館ではキュレーターへの聞き取りを行った。その他大会会期中に未来博物館、エキスポシティ Terra に訪問する機会を得た。

(3) 派遣成果

1. 分科会セッション：ICOM-EXHIBITION

12 日、13 日に開催された EXHIBITION 分科会には概ね 100 名程度が参加していた。研究発表に近いセッションでは大学や博物館職員、実務に近いセッションでは博物館の国際担当や巡回展企画・運営に関わる企業が多い印象であった。

12 日 13 時から 14 時半のセッション A では、“Shaping Tomorrow’s Stories: Emerging Trends in Content Development (今日の展示におけるコンテンツ開発を変革する最新のトレンドを探る) ”、として、アラブ首長国連邦 (大学)、中国 (美術館)、イギリス (大学)、イラン (科学館)、オーストラリア (大学)、香港 (美術館) の 6 名から発表があった。展示におけるストーリーテリング、参加性、包括性、没入感の醸成といった昨今の課題に対し、AI の活用や五感を刺激する展示事例やワークショップ事例が紹介された。

同日 14 時 45 分からのセッション B は、EXHIBITION ボードメンバー 4 名のファシリテーションによる巡回展ワークショップとして、巡回展の具体的な実施にかかる知識や経験を順を追って確認していくセッションが設けられた。本セッションは複数のテーマについて、ファシリテーターが自身の知見を共有したのち、会場からも意見を募る形で進められた。取り上げられたテーマは次の通り。テーマの選択：多様なオーディエンスの共感を呼ぶ、魅力的で関連性のあるテーマの選び方、ベンダー契約：ベンダーとの契約交渉と管理の基本、契約フォーマット紹介、展示の巡回：展示物の危機管理、法的影響などの事例、ロジスティクス：巡回展の輸送や設置に関わる経験事例、巡回展のマーケティング：レンタル契約や交渉に関する知識。2014 年より複数回の ICOM-EXHIBITION (前 ICEE) 大会に参加してきたが、このようなより実務的なセッションは初めてであった。会場からも多くの意見やコメントがあり、今回参加した EXHIBITION セッションの中で最も賑わいを感じたセッションだった。

13 日 14 時半からは ICOM-ICEE 時代より恒例の “Marketplace of Exhibitions” セッションで、企業や博物館による巡回展パッケージの宣伝が行われた。全体で 90 分間のセッションで 1 枠 3 分、時折オンラインでの発表も交えながら 25 件前後のプレゼンテーションが矢継ぎ早に行われた。巡回展の題材はガウディ、タイタニック、ベルリンの壁、ガリレオガリレイ、ミイラ、ダンス、アンコールワット、オルカ、エジプト等、普遍的で汎用性がありそうなものが大多数で、その他に必要な面積等の要件が示され、価格については個別交渉として連絡先が示されるプレゼンテーションが基本形であった。尚、2014 年頃は “Marketplace of Exhibitions and Ideas” として、セールスだけでないアイデアベースの発表もあったが、今回のセッションはよ

り実務的な印象を受けた。

2. 分科会セッション：ICOM-NATHIST

15日 ICOM- NATHIST の IC-day はエキスポシティ内 Terra を会場に行われた。会場参加者は概ね 30 名程度でオンラインの参加者も 10 名程度いる様子であった。参加者は自然系博物館職員が中心で、他に行政職や大学研究者などであった。

10時から約1時半開催されたセッション1は、”Support Group on Museum Technology: Embracing Both Breakthroughs and Challenges in the Digital Transformation of Museums (博物館のデジタル変革におけるブレークスルーと課題の両立)”と題して、フィリピン、フィンランド、マレーシア、台湾、ギリシャ、日本より6名のプレゼンテーションが行われた。12日に参加した ICOM-EXHIBITION と同様、参加性、体験性、没入感といった昨今のアプローチにデジタル技術をどのように生かせるか、生かしたかという話題が中心であった。一方で NATHIST では、それらデジタル技術が実物資料とどのような関係性であるべきか、展示内容についても技術先行ではなくまずコンテンツとして訴えるストーリー性があるかといった議論が重視されており、参加者が皆同様の問題意識を持っている様子が確認できた。

11時半から約1時間半は、会場となったエキスポシティ内 Terra のガイドツアーに参加した。2020年に開催されたドバイ EXPO の中で、いくつかのパビリオンは継続して現在も公開されており、Terra はその1つである。地球の内部をテーマに水中と地中の2つのコースを巡り、環境問題を考えるストーリーであった。展示手法としては、一昔前のディズニーランドのような既視感のある造作や演出で空間全体が構成されており、ストーリーもありきたりであったため、自身を含め NATHIST 参加者からの反応は今ひとつであった。

14時から約1時間開催されたセッション2は、”Traditional Ecological Knowledge in Museums: Challenges and Ethics in Exhibiting Living Knowledge Systems (博物館における伝統的な生態学的知識の扱い：生きた知識体系の展示への挑戦と倫理)”と題して、近日開館するアラブ首長国連邦アブダビ自然史博物館の事例、オランダロッテルダム自然史博物館の事例の2発表があった。このセッションでは、科学的なアプローチだけでなく、古くから伝わる地元住民の知恵や言い伝えなどこれまで非科学的と見做されて来た知恵を展示に取り込むこと、それらと自然系博物館が共存することについて議論が行われた。伝統的な知恵に対して敬意を払い対等なパートナーとして扱うことや、そうしたパラダイムシフトが起きていることが議論の中で確認され、興味深いセッションであった。

3. アラブ首長国連邦における博物館展示の状況調査

17日～19日に訪問したドバイ水族館、ドバイドルフィナリウム、エティハド博物館、シャルジャ水族館、海洋博物館、自然史博物館に加え、16日大会エクスカージョンで訪問したアル・ヘファイヤ山岳保全センター、コール・カルバ・マングローブセンター、大会会期中に訪問した未来博物館、エキスポシティ Terra を含めて報告する。

今回の調査では自然系展示における中東の自然観の扱いや表現の有り様を探ることを目的としていたが、展示に関しては外資により構成されたものが基礎にあり、総じて展示内容や表現における「中東らしさ」にそれほど強い特色は見受けられなかった。しかしながら、博物館や展示の成り立ち、その方向性は興味深いものがあった。アラブ首長国連邦は7つの首長国から構成されている。首長国毎に政策の方向性が違うことから、博物館にもそれらが色濃く反映されている様子であった。

具体的には、ドバイ首長国の展示施設は観光重視で資料の乏しい博物館（未来博物館、エキスポシティ Terra）、観光重視で展示や内容は程々の博物館（ドバイ水族館、ドバイドルフィナリウム）が多い印象で、入館料設定も高額な施設が多かった。例えば未来博物館やドバイ水族館は日本円にして7000円程度が最安の入館チケットで、追加の料金を支払うことで入館の行列を飛ばせたり、体験的な内容が追加できたりする仕組みで、複数の価格設定が準備されていた。ドバイ首長国連邦の成り立ちを扱うエティハド博物館を除き、展示内容に中東の自然観や都市開発の影響等を受けた独特の展示が展開されることは無かった。エティハド博物館はドバイでの訪問館の中で唯一ICOMカードが適用され、入館料設定も400円程度であった。

他方、ドバイに隣接するシャルジャ首長国は文化に力を入れており、博物館施設にもそれらが反映されていた（シャルジャ水族館、海洋博物館、自然史博物館、アル・ヘファイヤ山岳保全センター、コール・カルバ・マングローブセンター）。訪問館はいずれもローカルな資料・話題を扱うことを重視しており、展示手法に目新しさはさほど無いものの、教育的な要素は強く感じられた。ICOMカードが使える館も多く、入館料が必要な場合も日本円で800円程度であった。

シャルジャ水族館、自然史博物館ではそれぞれアシスタントキュレーターへの聞き取りを行った。両館とも、キュレーターまたアシスタントキュレーターの役割は、展示、研究、教育、運営、財政と博物館に関わる全てのことを扱うとのことである。

シャルジャ水族館は隣接する海洋博物館と共に、Sharjah museum authority という非営利団体の所属館であった。この組織全体で17人程度のキュレーターがおり、水族館にはそこからキュレーター1名、アシスタントキュレーター1名が配属されている。アシスタントキュレーターの Marwa に話を伺うことができた。水族館の生体資料はすべて地元の海から収集する方針を立てており、飼育に関する研究のほか、毎週の子供むけ教育プログラム、大学生の受入とトレーニング、ウミガメのリハビリテーションプログラムなどの活動にも力を入れている。水族館は2008年開館で、Sharjah museum authority 所属館の中でも古い。設立時はトルコの子会社による設計製作であったが、現在の展示造作などは基本的にアラブ首長国連邦内の企業が実施している。施設の老朽化もあるため、計画に沿って5年毎に部分リニューアルを進めている。自国の水族館同士での情報交換は頻繁とのこと。アブダビ首長国の政府設立の水族館の見学を勧められた。

自然史博物館は砂漠地域をハビタット毎にジオラマや標本を用いて解説し、砂漠生物の特徴などを体験的に理解させる工夫が各所にみられた。老朽

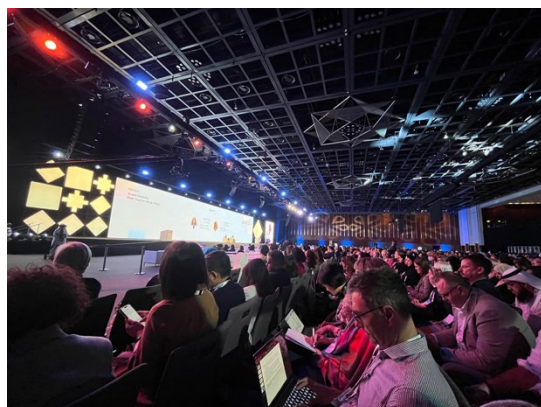
化で使えない展示物はあるものの、地域性が高く面白い内容であった。展示見学後にはアシスタントキュレーターの Afra より話を伺い、収蔵庫も合わせて見学させて頂いた。自然史博物館は 1995 年に、シャルジャ統治者であったシェイク・スルタン・ビン・ムハンマド・アル・カシミ殿下により開設された。設立時はイギリスの会社が設計製作に携わり、現在は自館のスタッフを中心に自国の会社と協力してリニューアル計画や改修を勧めている。15 名ほどのスタッフがあり、そのうち研究者は 3 名所属している。資料収集、展示テーマ共に地域の自然を対象にしている（地学は地球全体を扱っているが、展示資料は地元のもの）。特に植物のコレクションは 40 年に渡る国内最大のコレクションとなっている。収蔵庫設備は 1 部屋のみで、温湿度管理が必要な全ての資料がまとめられていた。スペースの制約はあるものの、現時点ではまだいくらかの余裕があり、地域の資料を網羅するべく収集を進めている。砂漠気候において、暑い時期の結露の問題等が深刻な様子であった。

（４）成果の活用計画

今回の成果は、本報告書のほか、公益財団法人日本博物館協会発行の機関誌「博物館研究」ほかいくつかの媒体で広く公表することを予定している。また所属館内においても同様に、研究会等の機会を利用して情報共有を行い、館としての ICOM への関わりを後押ししていく。

今回の派遣により、世界の博物館のトレンド、課題を把握することができ、日本の博物館の在り方を考える材料を得ることができた。博物館の現場職員だけでなく、大学での学芸員課程の講義等においてもこれらの話題を広く発信し、日本の博物館の将来を担う人材育成にも繋げていく。

自身の研究活動においては、得られた知見を今後の展示計画や展示開発に生かしていく。また今回の派遣で、国内外の人的ネットワークを強化・構築することができた。年度内に計画している巡回展の海外調査や、将来的な国際巡回展の研究的取組に向けて、具体的な準備を進めていく。



ICOM ドバイ大会 メイン会場



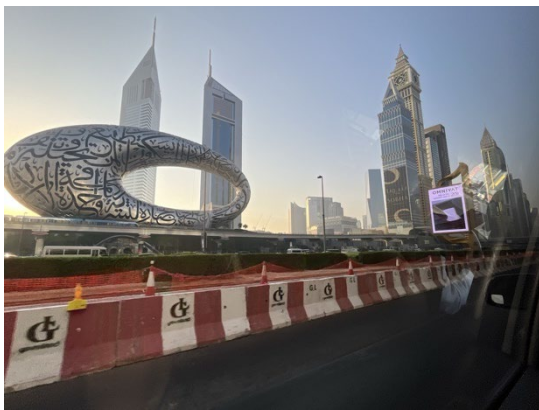
ICOM ドバイ大会 ブース展示



ICOM-EXHIBITION セッションの様子



ICOM-EXHIBITION セッションの様子



未来博物館



未来博物館



Expocity Terra



Expocity Terra



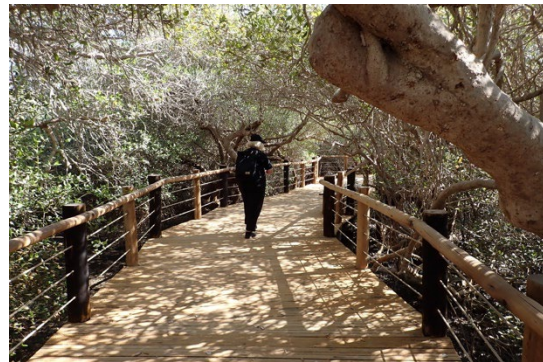
ICOM-NATHIST セッションの様子



ICOM-NATHIST での記念写真



コール・カルバ・マングローブセン
ター



コール・カルバ・マングローブセン
ター



アル・ヘファイヤ山岳保全センター



アル・ヘファイヤ山岳保全センター



ドバイ水族館



ドバイドルフィナリウム



エティハド博物館



エティハド博物館



シャルジャ水族館



シャルジャ水族館



海洋博物館



海洋博物館



自然史博物館



自然史博物館



自然史博物館



自然史博物館 收藏庫